神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

授業を創るⅠ「児童英語教育(1)」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横田, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/504

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

授業を創るⅠ「児童英語教育　①」

横　田　玲　子

はじめに

筆者が英語教育学専攻リカレント大学院のメンバーとして赴任してから５年が経過した。この間，大学院の授業，神戸市内小学校教員研修や授業支援等の他に，学部の全学共通科目「児童英語教育」および教職科目「総合演習」を担当している。本学赴任直前まで小学校教員だった筆者にとって小学校教員たちとの交流はあったものの，大学生を教えるというのは初めての経験であった。手探りでの授業づくりを始めて以来，実践をしながらの授業研究を進めていたが５年経過した現在，学部と２部の授業についての授業研究をまとめておく。数値化による何らかの結果を出した報告ではないが，授業の意味づけ，理論的背景，またその背景を基にしたオリジナル教材の内容等について述べたいと思う。また履修者の授業の振り返りとしてのリフレクションを項目別に加え，学習の様子を述べて行きたい。「授業を創るⅠ」として「児童英語教育」を，「授業を創るⅡ」として「総合演習」を扱う。

１．「児童英語教育」という科目

「児童英語教育」が存在する大学の多くは教育系大学や私学の小学校教員免許課程を有するところであろう。また時代の流れによって近年クローズアップされているフィールドであり，これから設置する予定の大学も多いのではないかと思われる。小学校免許課程を持たない本学で2004年度から学部の全学共通科目としてこの「児童英語教育」が設置されたことは時代に合った

開講であったであろう。

文部科学省は2008年３月の指導要領において，これまで小学校の「総合的な学習」の中での位置づけであった「外国語活動」を，「総合的な学習」から独立させ，５，６年生の必修科目として2011年度から年間35時間の実施を明記した。この公教育としての外国語活動については本稿においては詳しく述べることはしないが，20年間の議論の末，そしてその準備が完全であるとは言えない状況の中で小学生が学校で英語を学ぶことになった。それに伴って教材準備，教員研修，また地域人材の登用等において，小学校免許を持たない者でも公教育の英語活動に関わる機会は全国的にも広がった。その意味において，これから社会に出ていく大学生，しかも外国語大学の学生にとって「児童英語教育」という科目は彼らの将来のどこかの時点で役に立つ可能性は大いにあるだろう。

「児童」は学校教育法において６歳から12歳までのすなわち小学校の学齢期の子どもを指す。「児童英語教育」をそのままで理解すると６歳から12歳までの子どもたちへの英語教育ということになるが，その内情は「学校教育」と「学校外教育」に分かれる。この両者の根幹にある教育理念は共通する部分が大いにあるだろうが，現実の場においては大変違うプロセスと内容を持つ場合が多い。前者は言うまでもなく公教育（義務教育）としての場における英語教育であり，後者は民間企業や私塾，家庭教師を含めた教育である。児童や保護者の意思によらず全国の小学校で行われる教育の科目としての英語と，習いに来る児童だけを対象にした学校外の英語教育との違いは大きい。

筆者自身は学校制度の中での英語活動で実践を積んできたが，本学の学生らにより有意義と思われる「児童英語教育」を提供すべく，学校教育の中でも外でもできる児童英語教育を目指して授業創りをしてきた。

２．全学共通科目「児童英語」と外大生

全学共通科目としての「児童英語教育」の存在意義は何であろうか。「教職をとってないんですが履修しても大丈夫ですか？」と初回の授業で聞かれることがある。教職科目履修者の多くは「教員」としての自分の姿を想像しながら教職科目の授業を受けるのであろうが，この科目は教養としての教育に関する科目である。履修者の多くは教員にならずとも，将来子どもを持つ親になるであろうことを考えればこの科目の持つ意味は大きいのではないだろうか。「外大を卒業したお父さんやお母さん」になった時，子どもの年齢に少しでもふさわしい英語教育について考えることができたり，小学校教育の中での英語活動について理解するための基礎となる教養としての「児童英語教育」が本学における全学共通科目の内容としてふさわしいと思われる。

あまり深く考えずになんとなく楽しそうな科目名だからと履修してみようと思う学生もいると思うのだが「自分は教員になるつもりはなくてもこの中の多くの人が将来小学校に関わることになる。なぜなら親として子どもを小学校に通わせることになるからだ。」と話すと多くの学生が「なるほど」といった表情を見せる。だが授業を進めていくうちに実は教養は将来のためというよりも，現在の自分にとってのもので，児童英語教育を学ぶことは今までとは少しちがった英語学習の経験であったり，異文化理解であったり，コミュニケーション能力向上につながることに気づく学生は多く，また筆者も，将来のためではなくその時点を生きる学生たちのためになる授業を創ろうと考えている。

全学共通科目であるのでいろいろな学科，学年の学生が集まることも教室内の異文化理解やコミュニケーションを促進するのに役立つ。英語に対する劣等感を持ちながらの履修者も含めて，子どもたちに英語を教えるという場面を想定して発音を洗い直すこと，英語以外の言語を専攻している学生も含めて英語で意思の疎通を図っていくこと等，歌やグループ活動を通してそれぞれがそれぞれの立場で学習を進めていけることは全学共通科目ならではの

英語科目だと言えるのかもしれない。

３.「児童英語教育」の授業の核，理論的背景

3.1　ホール・ランゲージと経験主義

授業を構成するにあたって筆者がその核に据えていることは，ホール・ランゲージの理論に基づいた経験主義による授業構成である。ホール・ランゲージは1980年代にアメリカで草の根運動的に起こり，その後教育界で大きな影響を及ぼした教育理論，および方法論であるが，その理論は教員教育にも及んでおり，ホール・ランゲージによる教員教育についての実践論文集もアメリカでは出版されている。筆者が担当する本学における「児童英語教育」も，その最終目的が明確な「教員養成」ではないものの，「教えること」を視野に入れているという意味においては教員養成に準ずると言えるであろう。よってこの授業構成において，このホール・ランゲージによる教員養成の様々な要素を取り入れることは妥当であると考える。またホール・ランゲージを実践することは経験主義の視点を取ることであり「ホール・ランゲージ」と「経験主義」の２点が授業を構成していく上での核となっている。

3.2　ホール・ランゲージの応用

ホール・ランゲージは主に読み書きに関する理論として知られているが，筆者がこの「児童英語教育」の授業を創り上げていく上で参考にしたものは教員教育におけるホール・ランゲージの応用である。筆者はそれを以下の３つの点に分けて応用を考えた。

１．学習の振り返りを重視すること.

２．教室内の社会的関わりを重視すること.

３．指導者をも学習者として尊重すること.

これらの学習理論は Whitmore et. al（1996）が以下のように説明している。

3.2.1　学習者の振り返りを重視すること

学習のプロセスにおいて，何が学びであったのかを振り返る重要性について以下のように述べられている。

- Reflection is a central part of the learning process, and self-evaluation is a major part of the reflection process (p.3).
- Learning happens best when learners have the opportunity to reflect on their learning (p.181).
- All learners need time to reflect on what has occurred in order to make sense of those experiences and to organize ideas for future use. Reflection, says Dewey, is the "heart of intellectual organization and of the disciplined mind" (p.43).

学習において，自己内省となるべく振り返りを行うことにより，何が新たな発見であったのか，自分に何が学びになったのかを学習者自らが気づくことの重要性といえよう。「やりっぱなし」にならずに，学習を振り返ることができる授業構成が必要であり，評価に関しても何がどのように学習になったのかを自らがのべ，自己評価が可能になる計画と，そのことを学習者が理解しながら授業に参加できる計画が望まれると考えられる。上記のことをふまえて14回の授業のそれぞれの最後の10分，あるいは一つの教材の終了時に，学びについてを文章で記する授業を構成した。

3.2.2　教室内の社会的関わりを重視すること

学習において，自分の学びを他者と共有したり，他者との関わりの中で学習を進めて行くことの重要性については以下のように述べられている。

- Whole language brings the outside world into the classroom by valuing and then relating learners' life experiences to classroom learning experiences (p.4).
- Each whole language classroom invents itself as a learning commu-

nity (Whitmore and Crowell 1994) (p.4).

- A major aspect of education is being socialized into a community: joining the literacy club (Smith 1988) (p.4).
- Whole language teachers value collaborative learning communities and consciously work to create a sense of shared involvement (p.4).

教室内の社会的関わりとは，学習者同士が互いに意見を述べあったり，助け合ったりする場面を授業の中に構成することによって可能になると考えている。先の引用にあるスミス（1988）が言うように，教育の大きな目的は読み書きをする共同体の中で人との関わりをすることであるというのは筆者が多いに賛同できる部分である。スミスは我々が生きる社会を the literacy club と呼び，そこの会員になるための様々な会員証を増やしていくと述べている（1988）。それは学生証であり，免許証であり，保険証，卒業証書でもある。人が人の社会で生きていくために，我々は人との関わりを学ばざるを得ず，教育の目的の一つもそこの部分にある，という意見である。筆者の授業においても児童英語を学ぶと共に，クラスに集まった学生たちがその共同体の中で，自分の意見を述べたり，共に何かを作り上げたりすることは重要であり，それができなかったらいくら児童英語の方法や教材を学んだとしてもそれは知識の断片でしかないと考える。授業外では学生同士はサークルなり，仲良し仲間なりで様々なところで喋っている。しかし，授業の中で履修者同士が学習内容についてある程度真面目に忌憚なく，しかしリラックスして喋りながら学べる時間を作りたいと考える。

3.2.3　指導者をも学習者として尊重すること

教えることを学ぶ者が学習者であることは当然である。しかし，実際に教えてみて，計画の弱点を見つけたり，改善点を実感として学んだりするのは，学生だけではなく，指導者の側にも当てはまる。その意味では指導者も学習者である。

> Whole language teacher educators recognize themselves as learners along with the professionals… We push the limits of innovation and change, often while challenged by roadblocks that are cemented in the institutions and traditions where we work. We are visible learners in our classrooms, inviting our students into our own questioning as well as our blunders and miscues, and changing our practices based on what we learn (p.6).

学習者は履修者だけではない。授業内容について責任を持って構成，準備するのはもちろん指導者であるが，指導者が専門性の中で実践を重ねる一方，実践による指導者自身の学びを常に振り返り，改善すべく変化をいとわない学習者でもあることを忘れずにいることが重要だと考える。指導者としての自覚とともに，専門性の中での自身の成長を常に振り返ることが筆者の研究の中心であるかもしれない。そのことによって，筆者は「教育」を語るものとしての自己の存在を構築し続けられると思う。

3.3　経験主義という視点

上記のホール・ランゲージによる３つの点を理解しつつ，それらに基づいた授業創りをすると必然的に「経験主義」にならざるを得ない。履修者たちが将来外大卒の親になるという部分では，「児童英語教育」は将来のための準備とも受け取れる。また実際履修者の大部分がその時に児童英語教育の知識や方法を必要としているというわけではない。しかし「経験主義」の理論に立った時，「経験」とは将来のためではなく，現在生きるその時点での「経験」が重要であることを忘れてはならないと筆者は考える。これについてはデューイ（2004）が以下のようにのべている。

> ある意味では，経験というものはその後のより深くより広い経験を準備する点で何らかの寄与をすることは当然であるということになる。このことこそが，まさに経験の成長，連続，再構成を意味しているのであ

る。しかし，将来のある時期に役立つだろうということだけで教えられ学ばされる算数，地理，歴史などの一定量の教科内容を単に習得するだけで，そのような経験の準備的な効果が上がると仮定するならば，それは誤りというものである（p.70）。

大学の授業は小学生が習う教科学習と同等であるとは思わないが，経験の成長，連続，さらに再構成が成されていくことを考える時，履修者たちの将来のためというよりもその場にいる彼ら自身のためになる学習を考えるべきと考える。デューイはまた次のようにも述べている。

それでは教育的計画における準備の真の意味はなんであるのか。まず第一に準備が意味するものは老いも若きも自分の現在の経験から，自分が経験しているその経験の中にある自分のためになるすべてを獲得することである。（p.74）

われわれはいつでも自分たちが生活しているその時点で生きているのであって，ある別の時点で生きているのではない。またわれわれはそれぞれの現時において，それぞれ現在の経験の十分な意味を引き出すことによって，未来において同じことをするための準備をしているのである。このことこそが，長い目で見ると，将来に帰するところの何かになるための唯一の準備に他ならないのである。（p.75）

現時における経験が意味あると履修者に理解できてこそ，彼らの将来に役立つ可能性を持つ経験として学習されるであろう。この経験主義の理論は全学共通科目としての位置づけにもふさわしいと思われる。

以上が「児童英語教育」の授業を創るにあたっての理論的背景の概要である。創り続けることは，改良し続けることでもある。次項においては実際の半期の授業構成の概要と改良し続けつつもほとんど毎年使用している自主教材について述べる。

４．シラバスと教材

「児童英語教育」は全学共通科目であるので，どの学部のどの段階でも履修でき，実際毎年４回生の履修者も含め，全学科全学年からの履修者が集まる。学部，２部で同様の授業を提供するが，履修人数は年度によって様々であり，120人のときもあれば，二部では20人の時もある。もちろん120人の場合と20人の場合とは授業運営の詳細に違いは出てくるが，理論的背景や授業構成の主旨と中身は変わらない。

前期14回での授業であるが，シラバス上は大きく３つの段階に分けて構成している。

1．学習者が授業の中で居場所を見つけるための，また，他者との関わりを創りだすための基礎づくりの時間（居場所）

2．履修者が児童の立場になって経験的に教材を学ぶための時間（自主教材の実践）

3．実際に児童館を訪問して45分間，子どもたちに英語を教えるための教材開発，準備と実践の時間（実習）

上記の１と２の段階の間はかなりはっきりしたものであるが，２と３については相互乗り入れのような部分もあり，はっきりとは区切っていない。実習に行く日程とグループがはっきり決まった時点で，１，２回の授業をそのための話し合いと教材準備の時間に当てるが，それ以外は自主教材による授業の時間の後半30分を児童館実習の準備に当てる程度である。実際に訪問して実習に行く時間を14回の外の期末考査の時間のように位置付けている。また全14回を通して随時参考にしていける教科書として適当なものが見つからないので，ハンドアウトを作り参考資料として配布している。その資料を必ずA4のファイルに収納し，14回が終了したときには学びの経験をきちんと振り返ることができる資料となっているようにしておくことも「教えることを学ぶ」ひとつの経験として大切であると筆者は考えている。またこのすべての段階を通してグループ学習を中心に進め，学びのプロセスには必ず，仲

間がいること；仲間を作って仲間と話しながら共に学ぶことが計画されている。よって講義概要にもその意思があるものの履修が望ましい旨を明記している。以下，１．居場所，２．自主教材，３．実習，とそれぞれの概要を述べる。（紙面の都合上本論文では１，２についてを記載し３については次号に記載する。）

4.1　居場所

４月中旬から５月中旬にかけてはまず，履修者が授業の中で自分の居場所を見つけられ，初対面の居心地の悪さを感じながらも，声をかけながらネットワークの基礎を作るための活動に時間を使う。実際はメンバーを変えながらの自己紹介やディスカッションが主な活動である。

自己紹介については初回に口頭で簡単な自己紹介と履修動機を話してもらうが，その後履修者の同意を得て顔写真を撮ってそれを貼りつけたプロフィールシートを書いてもらい，全員分を印刷する。A4一枚での自己表現の工夫を課し，自分を知ってもらうための手段としての１枚であることを明確に説明した上で実践する。また出来上がったものは写真とともに名前，趣味等，イラストも含め，個人情報とも言える内容なので，フラットファイルを購入し，その場で所在が明らかになるようにファイルへの記名と全員の自己紹介ページをきちんとそのファイルに収めることを確認する。ファイルはそれ以降配付される資料を随時収納していくのに使用する。

また自己紹介を提出してもらった時点で，指導者である筆者がその中の一要素を英語にして名前を伏せ，それに該当する人を探し出す“Who am I?”というワークシートを作り，そのワークシートをもとに次時の授業では英語でそれに該当する人を探す活動を取り入れている。簡単な英語で活動できるが，会話を始める時の表現，必要な情報を得るための質問，相槌を打ったり，聞き返す表現，会話を終了するための表現等，すべて英語で行う。内容を深める英語のディスカッションではないが，人と関わる経験を英語で行う

にはふさわしい活動である。実際に全員の名前を見つけ出すにはかなりの時間が必要な場合もあり，人数が多い時には学年ごとに分けたワークシートを作成する。

その後の２，３回は日本語で数人でのグループディスカッションを中心に授業を構成する。ディスカッションのテーマは，大きく「効果的な学習とは」「早期英語教育賛成反対論」の二つで，それぞれに考える助けとなる資料を前もって配付し，それを読んで来てグループで討論する。「効果的な学習とは」については，「効果10倍の＜教える＞技術」（PHP 新書　吉田新一郎著）に記載されている幾つかの項目を提示してディスカッションを進める。これらは参加型のこの授業を始めるにあたってなぜそれがよいのかをまとめられた優れた資料となっている。自分の学習経験を振り返ったり，そうはいっても学習には他の形態もあるのでは，といった意見も出るが，この授業で起こるであろう参加型の授業の意味を理解してもらうのにはとても有効である。

「早期英語教育賛成反対論」に関しては，読み物として簡潔に双方の意見が述べられているものとして，静岡新聞社の2003年９月28日のウェブサイトに記載されている「静岡新聞社トークバトル　英語教育の低年齢化を考える　対論」において中山兼芳氏と大津由紀夫氏の対論記事が適しており毎年これを使用している。その両方の立場を読み，グループでそのことについて自分はどう考えるかを話し合い，児童英語教育が必ずしも賛成者だけではないこと，弊害となる場合もあることを理解してほしいと思っている。毎年履修者の何人かは「自分は小学校の時に英語をならっていたから英語教育の低年齢化はいいはずだと思っていたが，そうでない立場の意見を初めて読んで考え込んでしまった」という意見が出される。児童英語教育に対してのそれまでの自分の考えを見つめ直すとともに，今はどう考えているかを考え，またこの先この授業に出席し，児童館に実習に行く中でその考えがどう変化するかをも考えていけるきっかけになる資料である。

またこの「効果的な学習とは」と「早期英語教育賛否両論」とは別に公教育における英語教育に関するものや，子どもや教育に関する新聞記事を逐次配付する。小学校英語活動は実際全国でどの程度実践されており，指導要領改訂と共にどのように進んでいくのか，最新の情報，正しい知識を得られるよう別途配布資料を作る。以下はこれまでに使用した新聞教材例であるが，児童英語教育に直接関係ないように思えても，それぞれの著者の視点を読んで理解し，自分の意見をグループで述べることを重ねて，履修者はこの授業の中で自分の居場所を構築していけると考えている。出典はすべて朝日新聞による。

英語特区　がっこう　「抱きしめられなさい」(2005年)

小学校英語　学校の判断に任せよ（社説　2006年）

英語　小５から必修化へ　親, 財界は歓迎　専門家「まずは国語」(2006年)

視点　関西スクエアから　大学の勉強とは「答えのない問題，自ら学べ」(2006年)

私の教育再生　ピーター・フランクル　英語より表現力磨け（2006年）

仕事力「甘ったれるなよ」 坂本龍一（2009年）

グループディスカッションを30分程度でメンバーを変えながら何回か行うことで，履修者らがお互いを知る機会となり，教室に入ってくる時の緊張した表情も和らいでくる。また，授業の外で会った時にも挨拶をし合うことを授業の最後に付け加える。大学の授業にそこまでするのか，という異論もあろうが，受験勉強で個別的な勉強に打ち込んで来ざるを得なかった履修者もいるだろうし，大学が学校教育として最後の経験であり，何をどう学ぶかの自由があると共に，他者への関わりを含めた学び方を経験することも大切だと筆者は考えている。以下はこの「居場所」づくりの授業における活動後の学生の振り返りである。

Who am I?　活動のリフレクションの抜粋

●今回の授業で感じたことは一人一人と質問し合う時に英語でなかなかうま

く表現できなくて同じことばかりいってしまう自分がくやしかったです。でもお互い楽しく話すには話しを続けて行くことが大切なんだなあと思いました。英語は本当に自分で使っていかないとしゃべれないものだと思います。

- 不安だったけれど，穏やかな雰囲気でリラックスしてできた。しかし途中で幾つか難しい点があった。まず自分が聞きたいと思うことがあってもどうやって英語でいったらいいのかわからない。いかに今までずっと英語を習っていながら使う機会がすくなかったかを痛感した。もっとしゃべってどんどんアウトプットしていこう！！
- こうして何回もいろんな人とふれあうことで，少しみんなの顔と名前もわかってきた気がします。もっと中身も知って仲良くなれたらなって思います。今日の五感を使って英語を教えるという新しい概念を知ってこれは使いたいと思いました。誰かが提示したものをするのではなく，「自分がやりたい」という気持ちを持って取り組むことでより意欲的に楽しくできるのではないかと思います。今度グループで自分の持ってきたゲームをします。楽しくかつ面白いの持ってきます。

4.2　自主教材の実践

履修者たちが大体顔を覚え，グループになってもすぐに活動できるようになってきたころを見計らって英語活動を始める。実際に筆者が小学校教員の時に教室で行っていた教材を提供するが，学校教育現場でない家庭教育や個人の私塾としての英語教室で使うのに適した教材を選んでいる。どれも経験的に学ぶ教材であり，履修者は実際に子どもになったつもりで英語の指示を聞き活動を進めていく。以下はほぼ毎年行う自主教材である。

4.2.1　英語の歌

筆者の授業の中ではいわゆる英語学習のために作られた歌はほとんど使用

しない。歌えるようになって子どもたち自身がそのことを喜び何度も歌おうとした歌，また本学に来てからも小学校での英語活動授業支援に行き，子どもたちや教員たちと共に学んだ英語の歌を紹介している。言いかえれば，抽象的な表現ではあるが，子どもたちがその歌を歌えるようになって，それを心の宝として残すことができる歌，子どもたち自身が歌ってみたいと選んだ歌を扱う。よく取り上げるのは，Take me out to the ball game，きらきら星，ドレミの歌，エーデルワイス，おじいさんの古時計，ジュピター，Amazing Grace，また最近では「君をのせて」の英語バージョンなどである。Take me out to the ball game はまず，聞き取りのためにディクテーションを行い，自分が聞き取った言葉をもとに意味をつなげて歌を再生していき，最後には正しい歌詞で歌うというプロセスを踏むが外大生にとっても簡単そうでも実は案外難しい英語の学習の機会となっている。

これらの英語の歌は授業開始時の15分程度で行う。筆者が実際に子どもに教えるように教え，指導法を見せる。th や f の発音をどのように見せ，どのように教えるか，大学生を前に子どもに教えるように教えるのは，こちらとしても勇気のいることであるが，「子どもが見てわかるように発音をはっきり，口の形を見せながら教える。」と説明しながら実際に教師としては，「ほらほら！見てごらん！こうやるのよ！こうよ！見てみて！じゃあやってみるよ！」とこちらが実際に小学生の前でやるように見せながら授業を進める。

実際にこれらの英語の歌を学んで，履修者たちは自分の発音をかなり客観的に振り返ることができ，初めて L と R を区別できたとか，今まで曖昧でいい加減な発音だったのがよくわかったという感想がよく聞かれる。

歌についてのリフレクションの抜粋

●改めて声に出して英語を発音するということの難しさと大切さに気がついた。自分の発音は本当に中途半端なのでもっと会話の中でも自然にうまく発音できるように注意したい。またやはり恥ずかしさを捨てないと，人の前で話すことはできないと思う。

●基本のアルファベットが自分の会話の中で正しく言えているかすごく気になった。意識して話そうと思った。
●RとLの発音など言語は声に出さないと習得できないということを再確認できた。児童に対してはよく見せるということなど，教える立場のむずかしさがわかった。
●英語の音楽の聞き取りをすることで自分の発音の危うさがわかった。ThやLとRの違いなど練習して自分の発音に自信をつけたいと思う。

4.2.2　工作や料理に関わるもの

英語を使っての工作や料理は，Total Physical Response, Communicative Language Teaching, Task-based instructionなどの指導法を総合して使えるため，筆者が小学校で多く実践してきた。また，活動が単に英語学習のためで完結するのではなく，人との関わりを生み，その関わりを発展させるための意味のある活動として位置付けることがWhole Languageとして様々な指導法を活用することだと考えている。工作とは言っても，子どもたちが最後に家に持ち帰ってもごみになるものを作らないという点も大切である。以下は毎年行う活動である。すべて筆者のオリジナル教材である。

4.2.2.1　“5 Fat Sausages”

典型的なTPR（Total Physical Response）の教材であるが，英語での指示を聞きながら，はさみ，のりを使っての簡単な工作である。また5色のソーセージを作るために他の色を持っている人から紙をもらわなくてはならず，PleaseやThank youを実の場で使うことができる。また出来上がったフライパンとソーセージを持って歌い，リズムに合わせて体を動かす。小学校低学年の児童に向いている活動である。歌に関しては「こどもと遊ぶ英語ミュージックボックス」（ピアソンエデュケーション）に収録されている5 Fat Sausagesを使用している。

数人のグループで机を合わせて工作を行う。指示通りにやっていけば大学生はほぼ失敗なく作れるものであり，出来上がったフライパンに５色のソーセージを貼りつけ，その真ん中にグループの集合写真をつけることによって，フライパンは最終的には写真のフレームになる。またグループでの写真は参加した授業の記録でもあり，その時どう思ったか，何人で作ったのか，隣の人の名前は何かなど，さらに英語の表現を学ぶ教材にもなる。指導に使用した英語表現を一覧にして後で配付することによって，指導する場合のシナリオに近いものを履修者たちは手にする。実際に何という単語で話されていたのか，子どもたちを相手にしながら工作をする場合の単語，言い回し等，大学の英語教育ではあまりなじみがないが実用的な表現や単語を紹介することができる。それらの多くは使ったことはなくても言われてみれば理解できるものがほとんどではないかと思う。

この教材は工作教材としての初回にふさわしい簡単なものであるが，教室で子どもたちが集まった時にはまず指導者は，緊急の場合の避難経路がすぐに頭にあること，ドアの前に物を置かないこと，地震や火事の時にはどうするか，色を扱う場合色弱の子どもへの配慮をどうするか等も教える。これらは教える側に立って初めて知ることであり，教材と共に大切な情報である。

履修者のリフレクションの抜粋

- フライパンとソーセージを作る作業で後片付けの指示まですべて英語でやることで，より多くの英語を聞けるなと思いました。
- ５色集めるという細かいところも人とコミュニケーションを取るというきちんとした意図があるというのは今まで考えたことがないものでした。英

語教育の時間はしゃべってる英語だけじゃなくてひとつひとつの動きが勉強になるのかなと思いました。

4.2.2.2　T シャツペイント

自分の T シャツを持ってきて，それに名前や単語をシールで貼りつけ，その上に油性のペイントで虹を１立方センチのスポンジを用いて描く。乾いてからシールをはがすと，シールがあった場所が生地の色で残り，虹の中に単語がはっきりと浮き上がる。これも TPR で作業を進める教材である。またスポンジペイントは学校教育の中では扱われていないので，絵筆でない色付けの感覚を楽しむこと，虹を７色として扱うがそうでない文化が世界にはいくつもあること，また７色の色の英語名称を知ったり，７色の並びが自然界の光によって作られる順番であること，そして，色を並べるときにはその並びに準ずると美しく並べられることが実感として学べる。出来上がった T シャツをみんなの前で見せて簡単なコメントを言ったり仲間の T シャツを誉めたりする活動も含まれる。

簡単な作業のわりに，出来上がりが美しい。最後にシールをはがすところでどれだけわくわくするか，子どもの気持ちがよくわかる教材でもある。筆者が小学校１年生を担任した時にやり始めた教材であるが，大学生や教員研修でも行い，毎回最後までとても楽しく活動を進められる。世界で１枚しかない T シャツができること，また簡単な工夫で文字が浮き上がることなど実際にやってみてわかり，出来上がって嬉しいと思える教材である。

履修者のリフレクションの抜粋

●スポンジペイント，非常に楽しかった。スポンジだと自分の指の動きがそ

のまま伝わるので，筆よりも直接的で形も変えられるから面白かった。先生の話で宗教的な理由もあるから行事やイベント関連の英語の遊びを子どもたちとする時は配慮しようと思いました。英語を勉強する意味についてまた考えさせられました，難しい。

- 道具を使うのに順番を待ったり，時間内に作業を終わらせたり片付けをきちんとする，というようなことも意識を向けなければいけないことに気付きました。児童館実習のビデオでも感じましたが，英語を教えられるだけではだめだと思います。
- 小さい頃にもどったようで楽しかった。作ったものを持って帰れてさらに使える。作業中は会話が弾むというわけではなかったが，あちこちから“Thank you!”“You're welcome!”が聞こえてきた。英語を学習し始めて最初に覚える表現だろう。実際のシチュエーションで自発的に使うのはよい練習になる。
- 出来上がった時，自分だけのＴシャツが名前入りでできてるってこんなにも嬉しいことなんだと思いました。この活動を通して子どもたちに教えられることは色の名前とか，文字のサイズとか，いろいろあるけど，やっぱり一番大きいのは「自分の名前のスペルがわかる」ってことだなと思いました。とてもたくさんある英単語の中で，まず何よりも覚えておくべきスペルだし，名前は一生使うし，こんな風にインパクトのある教え方で教えられたら忘れないし嬉しいと思う。あと個人的に今日の授業は一番英語を使って班の人と何気ない会話ができたのでよかったです。

4.2.2.3　簡単ケーキづくり

ホットケーキミックスを使って簡単なカップケーキを焼く活動である。小学校では中学年の英語活動で多く取り入れたベーキング活動の一つである。パン，ラム・ボール，クッキー作り等幾つかのレパートリーがあるが，材料も少なく出来上がりの失敗がなく，トッピングにオリジナリティーも加えら

れ，何より授業時間内でおいしいケーキが簡単に出来るのでこの教材を実施している。小学校ではTPRで実践してきたが，「児童英語教育」では英語のレシピを配り，パワーポイントで作り方を英語で説明した後はグループに任せて活動を進めさせている。タイマー付きの電気オーブンなので焦げ付く心配もなく，子どもたちには触らせないオーブンの鉄板の出し入れも，適切な解説（すべて英語であるが）さえあれば大学生には難しいことではない。焼き上がるまでオーブンの前を離れず，中の様子を見ているグループを見ると，大学生であっても新しいこと，目的がはっきりしていてそれを楽しみに出来る教材を実施するのは楽しく，仲間づくりにも役立つと思わされる。自分一人ではやらないかもしれないし，できないかもしれないが，グループで行うことにより，経験の幅を広げ，達成感を感じ，楽しみや驚きを共有できる仲間がいる。英語を使っておいしいものができる経験の学習は単に一人でレシピを読んで「なるほど，いつかやってみようか」と思うだけでは学べない。

履修者のリフレクションの抜粋

- 今回の活動は「ケーキを作る」という明確な目標があり，「さとうを混ぜる」「たまごを加える」のような単純な表現と単純な作業の繰り返しだったので，英語が使いやすく，以前の活動より，積極的に英語が使えた。最後に出来上がったケーキは上手な形ではなかったけど，みんなで一緒になにかをする！という目標を果たしきったものだと思う。そして目標を達成するためのtoolとして英語を使えたと思う。
- 様々なトラブルがありつつもカップケーキは美味しく焼けました！簡単な料理作りと英語の授業を組み合わせるのはとても良いと思った。ずっと心に残る授業になると思った。
- 手順をいろいろ間違えてしまい，泡だて器まで壊してしまってすみませんでした。でもすごくおいしくて，すごく楽しいケーキ作りができました。将来子どもと一緒にできそうです。

4.2.2.4　サンドイッチパーティー

活動のすべてを英語で行うことによって，簡単な言い回しに慣れると共に，必要なことを理解し，伝え，行動で示す活動である。またアメリカの典型的なサンドイッチの添え物を知りお金をかけずとも手軽にできる英語でのパーティーと集まった仲間同士がよい関係を作れるように，話題を提供しながら会話を進める経験をする。これは先にあげたケーキ作りまでの教材とは違い，会話を続けていくという意味では，出来上がりで完結する教材ではない。これまでの児童英語の総集編であり，最後のお楽しみパーティーのような意味合いもあり，通常７月に入ってから行う教材である。

市販のサンドイッチパンにジャムを塗った簡単なサンドイッチを作り，大きめのクッキーカッターでサンドイッチをくり抜く。サンドイッチに必要なものをグループの人数でもらいに来たり，ジャムの種類を聞いたり，抜いた型を英語で表現したり，メンバーのサンドイッチについてのコメントを述べたりしながら会話を楽しみながら時間をすごす。

笑顔で英語を話し続ける，というのは大学生にとっては簡単なようでいて実はあまり経験がない，というのが実際であるが，あらかじめどのようなことを話したら誰も傷つけることなく，楽しく会話を進められるかくらいのことは考えておくように指示をする。どんなに恥ずかしくてもカタカナのような英語を使わないこと，わからないことをただニコニコしてすませるのではなく，ちゃんと聞き返して会話を続けること，また英語が流暢にしゃべれる人はそうでない人のことを考えながら，わかりやすく，かつ相手もしゃべれるように会話をリードして行くこと等，細かいことではあるが，「人との関係」を構築していくためにいくつかのポイントは助言をしておく。生の人参をポリポリ食べることが驚きだったり，見事に星型にくり抜いたサンドイッチを嬉しそうに眺めて，英語で何と言おうかと考えていたり，様々な面での学習が可能である。また紙皿の形，数，ペーパーナプキンの色や模様等，英語で表現できる要素が多くそれらについて，仲間にどれがいいか質問した

り，自分がほしい色を選んで伝えたりする活動が含まれる。同じものでも必ず何らかのチョイスができるように教材を準備する。

履修者のリフレクション

- 英語しか喋ってはいけないというルールは難しいと思ったが，努力次第で何とかなった。パーティーのような場では自分はきっと気おくれしてしまうと思うのでどんな会話でも勇気を持って働きかけることは本当に大切だと思う。おいしいものを食べながらの会話は必ず弾むと思った。
- 今日はうまく英語でしゃべりながら楽しくつなげようと思ったが若干詰まりながらとぎれとぎれになってしまった。頭の中で質問は幾つか出てくるのに，どう聞いたらいいのかとか，こんな質問でいいのかとか，いろいろな考えがよぎって声に出すことができなかった。それは廻りの人に対してちょっと甘えているというか，私が言わなくても誰かが…という気持ちがあったからだなあと反省。子どもたちと触れ合ったら，なおさら相手任せにできないのだから，自分がちゃんとしないといけないと思った。

以上が試行錯誤を重ねながらほぼ毎年行う教材である。そのほかにも天候や人数に合わせ，一回は外での活動も取り入れるように努めている。ソフトフリスビーを用いてフリスビーを投げたり受け取ったりすることも日本の子どもたちの遊びではあまりやらないが，経験するにはよい教材である。フリスビーの形や色を表現したり，英語で書いた的に当てたり，投げる時に英語で数を一つずつ言ったりとゲーム性を持たせた実施ができ，履修者に任せてゲームを考えさせると，グループでいろいろなゲームを考える。また東町小学校の外大訪問の際の子どもたちのグループリーダーになって子どもたちに外大の中や研究室訪問の案内役も授業に付随する一環として希望者の参加を募る。子どもたちと一緒に昼食をとり，英語のインタビューのサポートをしながらの２時間は毎年大学生にとっても実際の小学生に接するいい機会となっている。

児童英語の授業時の天候も教材の一つとなる。風，雨，雲，空，光，木，草，花，これらのことを教えるにはフラッシュカードではなく本物を利用する方がよいと考えるからである。夕立のように降り出した雨の時，窓をあけて，草の匂いと雨音を感じ聞くこと，台風の風が雲をぐんぐん動かしていくこと等，単に wind とか rain とかの言葉を教えるよりも学習者の五感に語りかけながらの指導ができる瞬間を見逃すことはできない。

４月当初には「単に子どもが好きだから英語を教える方法を学んでみたい」とか「自分も小学校のころから英語を習っていたので教え方を知りたい」と履修理由を書いていた履修者も様々な教材を通して児童英語教育についての自分なりの洞察を深めていると思う。

これらの教材で経験的に学習を進めていく間に児童館実習の様子のビデオ視聴や実習で使用するのに適した教材の紹介等を行っていく。そしてこの授業の総まとめとして，児童館実習の準備，訪問授業の実習をむかえる。次号においては，この児童館実習についてをまとめる。

参考文献

Smith, F.（1987）. *Joining the Literacy Club*. NH:Heinemann.

Whitmore, K. F. & Goodman, Y.M.（1996）. *WHOLE LANGUAGE VOICES IN TEACHER EDUCATION*. NY:Stenhouse Publishers.

岡秀雄・金森強　（2009）『小学校英語教育の進め方』　成美堂。

ジョン・デューイ　市村尚久訳　（2004）『経験と教育』　講談社学術文庫。

久保野雅史・久保野りえ（2001）『こどもと遊ぶ英語　ミュージック・ボックス』ビアソンエデュケーション。

吉田新一郎（2006）『効果10倍の＜教える＞技術』　PHP 新書。

学習定着率 Web サイト
http://lowery.tamu.edu/Teaming/Morgan1/sld023.htm

英語教育の低年齢化　静岡新聞トークバトル
http://www3.shizushin.com/talkbattle/keisai/tb031019.html